

第4章

アラブ「家族」再考に向けて：研究動向と人口の概観 北アフリカ・チュニジアを中心に

岩崎 えり奈

要約

アラブ地域は 1970 年代に入るまで子沢山で知られる地域であった。ところが 1970 年代以降に急速に出生率が低下し、少子化に向かっている。少子化がアラブ地域の「家族」と社会にどのような変化をもたらすのかを考えるため、本稿では、アラブ社会の「家族」研究の動向と人口構造の変化を概観する。

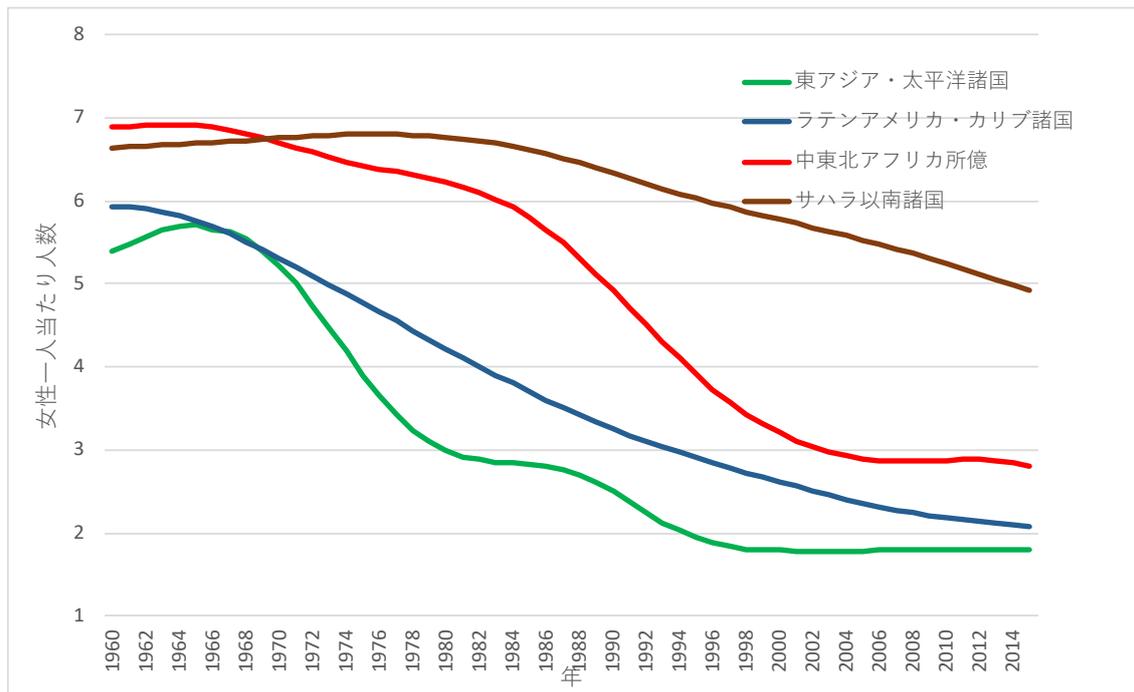
キーワード: 家族、人口、北アフリカ、チュニジア、アラブ、農村

はじめに

アラブ地域は 1970 年代に入るまで、子沢山で知られる地域であった。実際、中東北アフリカ地域における合計特殊出生率で示される女性一人当たりの子供数は 1960 年の時点で 6.9 人と推計され、世界で抜きんでて出生率が高い地域であった。ところが、図 1 にみてとれるように、1980 年代から出生率は急速に低下していき、2016 年の合計特殊出生率は 2.8 人である。

少子化がアラブ地域の「家族」と農村社会にどのような変化をもたらすのか。本稿では「家族」の変容を考えるとっかかりとして、アラブ社会の「家族」研究の動向を概観する。そのうえで、チュニジアを中心に人口動態の変化を解説する。「家族」はアラブ社会において重要で基本的な人々の生活単位であるが、人口はその根底をなしていると考えられる。

図1 世界の主要地域における合計特殊出生率の推移（1960～2016年）



出典：The World Bank, World Development Indicators より筆者作成

(<https://data.worldbank.org/>) (アクセス日：2018年3月12日)

I アラブ「家族」研究の動向

本節では、アラブ「家族」研究の動向をとくに農村研究に絞って概観する。

1 先行研究における分析視角の変遷

アラブ社会における「家族」の重要性に異議を唱える者はいないだろう。実際、人々の日々の生活において「家族」は欠かせない存在であることは、現地の人々と会話するなかで常感じられる。映画や文学作品などでも「家族」は必ず登場する。

研究においても、「家族」は重視されてきたテーマである。とくに1960年代から1970年代にかけて、アーイラ、大家族、部族、血縁集団、親族集団など呼び方や定義は様々であれ、「家族」はアラブ地域の研究者により盛んに取り上げられてきた。

ディシプリン別には、伝統的に親族組織に注目してきたのは人類学であった。1960年代から1970年代にかけて農村を対象に、チュニジア農村を対象にした Duvignaud (1968) やヨルダン農村を対象にした Antoun (1963; 1972) など数多くの研究が発表された¹。政治学では、ローカル政治における親族の役割がパトロン・クライアント関係などのテーマのなかで研究された (Antoun and Harik 1972; Gellner and Waterbury 1977)。社会学では「家

¹ Antoun の研究とヨルダン農村における「家族」については、加藤ほか(2017)を参照。

族」が近代化、社会変容のベンチマークとして注目され、最も変化に晒されると考えられた都市の「家族」を対象に研究がなされた。歴史学においても「家族」は重要なテーマであり、チュニジアについては Valensi(1979)やエジプトについては Baer の一連の研究(Baer: 1969; 1976)などがある。

日本においてはエジプト農村の「家族」共同体を扱った中岡(1973)、木村(1973)とその批判(加藤 1983)や、Iwasaki (2008)がある。フランス語で発表された研究も「共同体」アプローチをとる研究が 1970 年代までは多く、その代表的な研究としてはアルジェリアを対象にした初期の Bourdieu による研究がある。これらの研究では、「家族」は共同体論的アプローチでもって、集団的で封建的な規範ルールにより規制されてきた個人が資本主義の浸透とともに自立する結果、「家族」共同体が崩壊していくものとして捉えられてきた。

1970 年代までの研究に共通していたのは、モロッコ農村を対象にした Berque (1955; 1957)のように、社会の変化や相違を血縁的紐帯の強弱で説明する傾向が強かったことにある。農村の家族研究をあらわす一つの典型は、農村社会研究の中でも比較的数が多い労働移動に関する研究にみてとれる。労働移動研究は、村民が国内外の都市で就業しようとする動機を明らかにするため、社会経済的な分析から出発している。しかし、労働移動のパターンの地域的な偏差の説明になると、血縁的紐帯の強弱に原因を求めてきた²。

1970 年代までの研究で想定されてきた農村社会像は、居住区画ごとに共同体を形成する複数の父系血縁集団によって農村社会が構成されていた、とする共同体論的な農村社会像である³。ここでは、「核家族」と対照される「拡大家族」が農村社会の基本単位として仮定されていた。ここで言う「拡大家族」は、家長とその妻、未婚の子ども、妻子を抱えた既婚の息子を基本的な成員とし、父系的に秩序づけられた集団主義的な規範に基づく組織である。これまでの農村研究では、この「拡大家族」の解体をもって農村の変化が論じられてきた⁴。

しかしこのような「家族」に対する分析視角は 1970 年代後半から批判にさらされることになる。例えば、先述の Bourdieu は、自身のアルジェリア農村における親族関係の研究を自己批判し、現実には系譜関係が親族関係を規定しているのではなく、経済的・政治的な動機が現実の親族関係を規定していると論じた (Bourdieu: 1980)。また、モロッコをフィールドにした Geertz et al (1979)は親族関係が文化的な再解釈の産物であるこ

² 例えば、Simon (1990; 1995)や岩崎(1996)、Iwasaki (2006)を参照。

³ 例えば、Berque (1955)、Descloîtres and Debzi (1963)、Duvignaud (1968)、Gallissot et Badia (1976: 229-245)。

⁴ そうでない血縁組織の積極的な捉え方の貴重な例として、宮治(1993)がある。

とを明らかにした。

批判の背景には、第一に、社会科学における分析視角が全体主義的アプローチから個人主義アプローチへと変わったことがある。第二に、言説のレベルでは、近代を肯定するために否定すべき存在として、植民地主義者がつくりあげた家族共同体像が独立後もイデオロギー的に肯定されてきたという、共同体論アプローチに内在する二項対立的な言説の構造が指摘される⁵。

こうして1980年代以降、規範的な社会組織という捉え方にかわって、「家族」はネットワークないし社会関係として捉えられるようになった。「家族」・ジェンダー研究の分野では、「家族」を関係性として再考しようという関心が高まり、Hopkins (2003)、カイロの「家族」を扱った Singerman and Hoodfar (1996) や Singerman (1996)の研究などがある⁶。

しかし、総じて言えば、1990年代以降、「家族」研究は下火になったように思われる。その背景には、市場化のなかでの社会変革の担い手として国家や中間組織、企業などが注目されるようになった一方で市場原理とは異なる規範的組織である「家族」が関心を集めなくなったことがあるだろう⁷。と同時に、農村研究においては、資料的な制約によるところが大きい。とりわけ、世帯単位での土地経営、家計についてのまとまったデータ、土地経営・耕作慣行についての資料は皆無に近い。そのため、研究者が参照しえるような実証研究が少ない。その結果、実証研究がないまま、自覚的かどうかはさておき、北アフリカ農村研究では、「家族」の解体をもって農村の変化を論じる分析視角からいまだに脱却できていないように思われる。

2 「家族」と社会変化—Chauletの「大家族」モデル

「家族」を扱いつつも、「家族」の解体としてではなく農村社会の変化を分析するた

⁵ Charrad (1990; 2001)

⁶ アイデンティティにおける位置付けについては、Joseph (1999)を参照。チュニジアを対象にした研究では、家族史においては Temime (1999)、家族社会学の分野における問題提起については Ben Salem (1994: 13-27)を参照。

⁷ 1980年代後半以降に発表されるようになった小農の資本主義や国家への抵抗性に注目する研究にしても、アーイラを農民におきかえただけで、農業経営体を市場原理とは異なる規範をもつと仮定し、分析単位とする点で共同体論とかわらない。例えば、アルジェリア農村を扱った Bouchemal (1997)を参照。農民を市場経済の中の「農企業家」として位置付ける研究は、市場原理に一見するとそぐわない行動を制度の不在か未発達のためとみなし、分析の対象となしえない。構造調整期のエジプト農村を扱った Mehanna et al. (1994)や同じくエジプト農村を対象にした Hopkins (1993)、Mitchell (1998)を参照。

めの参考になる研究は、1960年代以降のアルジェリア農村を対象にした Chaullet による『土地、兄弟たちとお金』（1987年）である(Chaullet 1987)。

Chaullet は、平等な権利関係にある兄弟の連帯を組織原理とする「大家族」モデルが、マグレブだけでなく、中東・北アフリカ地域全般において準拠枠となる「家族」モデルだという。このモデルは、兄弟間の連帯がイスラームの教えでもあるところから、アラブ・イスラーム的なモデルでもあるとされる。

Chaullet によると、この「大家族」モデルは、北フランスにみられる「家族」モデルと対照的である。北フランスの「家族」モデルでは、婚姻を契機に新たな核家族世帯が形成されるのに対して、「大家族」モデルでは、その特色をなす兄弟間の連帯が、内婚制が理想とされることに象徴されるように、婚姻によって結ばれる夫婦関係によって断ち切られることはない。つまり、息子たちは結婚後に父親とは別の世帯を形成し、家長である父親が亡くなったとしても、兄弟同士の強いつながりを保持する。

Chaullet によれば、この兄弟間の連帯こそが、アルジェリア農民の行動パターン、ひいてはアルジェリア農村社会の階層化を北フランス型のパターンと異なるものにしたと論じている。北フランスの「家族」モデルでは、婚姻後の独立世帯形成というパターンをとることが、土地資源量の限界、労働需要の増加という経済的条件下で、土地の流動化、プロレタリア化と階層化をもたらした。それに対して、アルジェリア農村社会では階層化が経済活動の多角化する「大家族」と、「小家族」の零細農という独自の形で、階層化が現れたというのである。

Chaullet は、その理由として二つをあげている。一つは、アルジェリアの「農業革命」期の経済環境である。この時期のアルジェリアでは、経営規模の拡大や農業技術の導入が制約されていた。そのために、農外就業が唯一の所得稼得の戦略であった。もう一つは、兄弟同士あるいは他の父系親族との間でなされる「家族」共同耕作慣行である。

Chaullet によると、この慣行は、現代でも、別々に土地を保有する兄弟同士の「アソシエーション」という共同経営システムとして続けられている。現在においても、血縁原理とリンクした均分相続制度の下で、被相続権資格者である息子たちが土地を保有する父親と共同で農業経営にあたるばかりか、さらに父親の死亡後も、兄弟や他の父系親族と共同経営体を組織することが観察される⁸。この慣行の下では、息子たちは土地資産を共同保有し続けるから、農外就業はあくまでも兼業的な就業となる。と同時に、夫婦だけのよう核家族世帯で営まれる農業経営のように、農業労働時間の配分が問題にならない。さらに、「大家族」の戦略によって獲得された現金収入は、農業技術の導入や

⁸ 例えば、Bouchemal(1997: 155), チュニジア中部農村を扱った Gana (1998), チュニジア北部農村を扱った King (1997: 193-219), エジプト農村を扱った Latowsky (2000: 452-530)を参照。

土地の購入に充てられて農業生産性を増加させるとともに、商業活動などによる農外所得稼得源にもなる。こうした点から、「大家族」モデルが、農外就業による所得稼得という戦略に適合した組織形態であったとされる。

以上が、Chalet の著書の論旨である。彼女の議論は、農業経営形態の多様性にもかかわらず、「大家族」モデル自体を分析単位にしてしまったという難点はある⁹。とはいえ、彼女のこの著書は、アラブ・イスラーム的な「家族」モデルが国家権力の規制の下で農民により戦略的に再生産され、経済的効率を発揮することを明らかにし、この独自のモデルをもって、アルジェリア農村社会の構造を説明した点が高く評価できる。

II アラブ「家族」の人口学的変化—チュニジア¹⁰

以上で、北アフリカ農村を中心にアラブ「家族」研究を概観した。アラブ・イスラーム的な「家族」モデルを援用することでアラブ農村社会の変容を明らかになることが期待される。しかし、その際に留意しなければならないのは人口的な観点からみれば「家族」自体がここ 30 年間のあいだに大きく変化してきたことである。

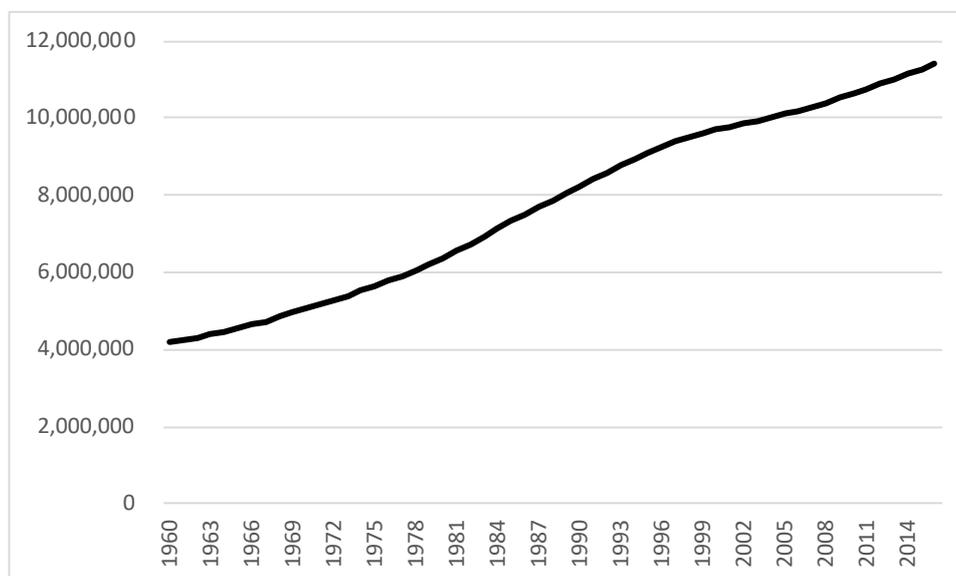
1 人口の推移—少子化

推計によると、20 世紀初頭までのチュニジアの人口は約 150 万人であった。しかしそれ以後チュニジアの人口は増加傾向に転じ、100 年間のあいだに 10 倍に人口が増加した。図 2 に示されるように、とりわけチュニジアがフランスから独立した 1956 年から 1980 年代は人口増加が著しく、1956 年に 378 万人であった人口は、次の 30 年間で 696 万人（1984 年）へと増加した。アラブ諸国のなかでチュニジアは人口増加率が最も早くに低下した国であり、現在、チュニジアの人口は 1130 万人（2016 年）である。

⁹ 「大家族」モデル自体を分析単位にしてしまった結果、アルジェリア農村社会の構造をあらわす「大家族」が成り立つ社会経済的条件を説明できなかった。例えば、なぜ「農業革命」という特定の時期に「大家族」が再生されたのか、なぜ国家が管理する「公的部門」ではなく、「民間部門」の大土地所有層に「大家族」が多くみられたのか、といった点である。

¹⁰ チュニジアの人口と家族計画については、岩崎(2018)を参照。

図2 チュニジアの人口推移（1960～2016）



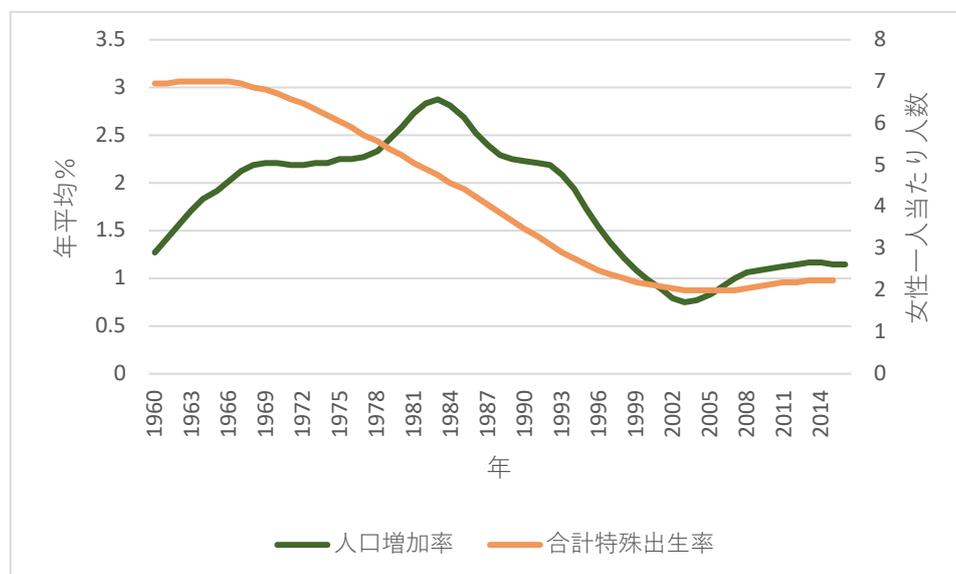
出典：The World Bank, World Development Indicators より筆者作成
 (<https://data.worldbank.org/>)(アクセス日：2018年3月12日)

1980年代以降、チュニジアの人口増加率は減少傾向に転じ、1984～1994年間で2.4%であった年平均人口増加率は2004～2014年間には1.0%になった(INS 2016:11)。

この人口動態に大きく影響しているのは、女性が産む子ども数の変化である。女性が生涯に産む子ども数の推計値である合計特殊出生率をみると、1966年に7.2であったその値は1994年に2.9、2004年には2.0にまで下がった(図3)。合計特殊出生率は2014年に2.4へと回復したものの、2000年代にいてほぼ2人の水準で推移しており、人口置換水準に達したと認識されている(INS 2015: 19)。

地域別にみると、1980年代まで、首都チュニスなどの主要都市を擁する沿岸都市部で出生率の低下が進んだ一方で、内陸部では高い出生率が観察された。しかし、1990年代以降、内陸部でも出生率は大幅に低下した。その結果、沿岸都市部と内陸部、都市と農村間で出生率の違いはなくなりつつある。

図3 チュニジアの年平均人口増加率（%）と合計特殊出生率の推移（1960～2016）



出典：The World Bank, World Development Indicators より筆者作成
 (https://data.worldbank.org/)(アクセス日：2018年3月12日)

2 婚姻状況の変化

婚姻状況に目を向けよう。結婚年齢についてみると、女性の平均初婚年齢は過去 50 年間の間に大きく変化し、1966 年の 21 歳から 2014 年には 27 歳に上昇した(表 1)。男性の場合は、26.8 歳であったのが 2004 年には 32.6 歳に上昇している。

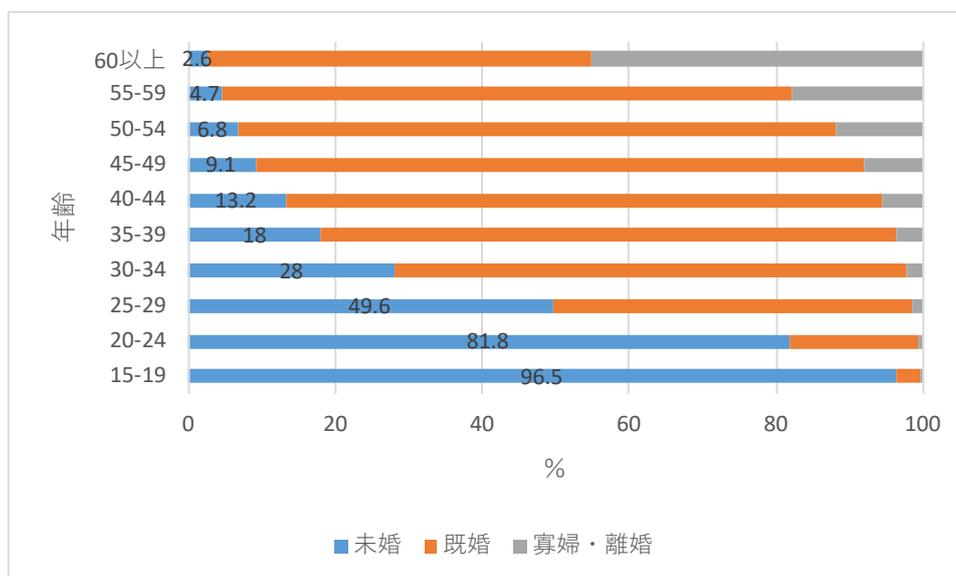
表 1 チュニジアにおける平均初婚年齢の推移

	男性	女性
1966	26.8	20.9
1975	27.1	21.9
1984	28.1	24.3
1994	30.3	26.6
2004	32.6	28.7
2014		28.6

出典 World Marriage Data(2015), INS(2016: 28),Vallin(1971: 252)

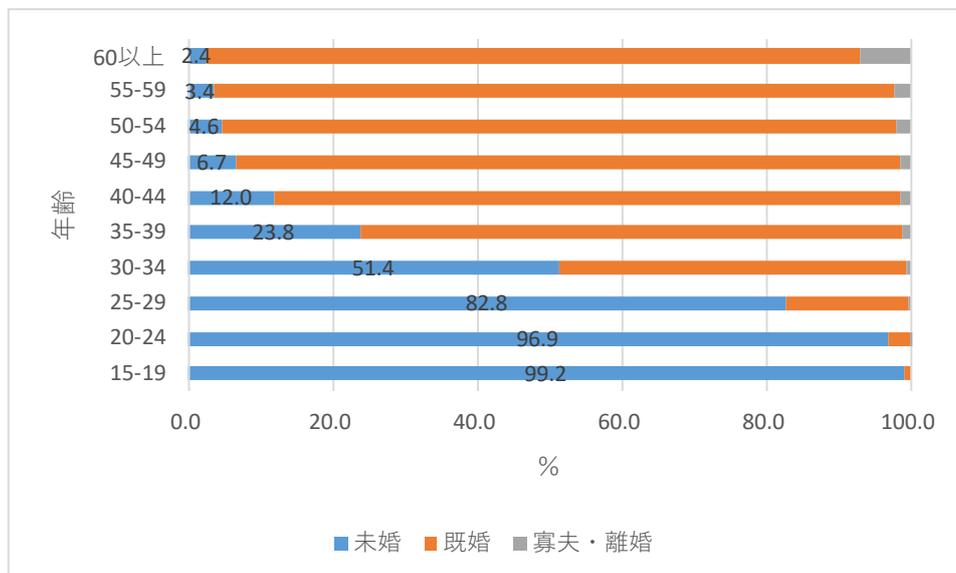
初婚年齢の上昇とともに、未婚男女の割合も増加している。図 4 と 5 は、チュニジア人男女の年齢階層別の婚姻状況を示す。45 歳以上の男女における未婚者の比率を指標とすると、その比率は 2014 年で 10%以下であり、生涯を未婚で過ごすチュニジア人男女は少ない。

図4 年齢階層別の婚姻状況(2014年) (女性) (%)



出典 INS(2016:21) より筆者作成

図5 年齢階層別の婚姻状況(2014年) (男性) (%)



出典 INS(2016:21)より筆者作成

20～24歳の年齢層における未婚女性の比率をみると、1966年におけるその比率は20～24歳の女性の27.0%に過ぎなかった。ところが、表2に示されるように、1984年には59.0%、さらに2014年には81.8%に上昇している。30～34歳の女性に占める未婚者の割合も高く、1966年にたった3.9%、1984年に9.7%であったその値は28.0%（2014

年)へと増加した¹¹。この比率は農村・都市間、地域間であまり変わらない。したがって、アラブ社会の女性の婚姻といえば早婚が特徴としてよく指摘されてきたが、それは農村・内陸部においてさえもみられなくなったと言えよう。

男性においては、1984年に17.7%であった30～34歳の未婚者の割合は2014年に51.4%に上昇している。つまり、現在、チュニジア人の30歳代前半の男性の過半数は未婚である。

表2 年齢階層別チュニジア人未婚男女比の推移(1984～2014年)(%)

年齢階層	男性				女性			
	1984	1994	2004	2014	1984	1994	2004	2014
15-19	100.0	100.0	100.0	99.2	93.3	97.0	97.8	96.5
20-24	91.4	96.3	97.7	96.9	59.0	72.3	83.5	81.8
25-29	51.9	71.0	84.1	82.8	24.6	37.7	52.7	49.6
30-34	17.7	31.1	50.1	51.4	9.7	18.1	28.0	28.0
35-39	5.9	9.5	19.1	23.8	3.8	8.9	15.4	18.0
40-44	3.2	4.7	8.0	12.0	2.2	4.7	9.2	13.2
45-49	2.7	3.0	4.1	6.7	1.6	2.3	5.4	9.1
50-54	2.4	2.4	2.8	4.6	1.5	1.8	3.3	6.8
55-59	2.2	2.1	2.4	3.4	1.9	1.3	2.0	4.7
60歳以上	3.4	2.2	2.1	2.4	3.0	1.4	1.2	2.6
計	43.4	44.9	46.6	41.2	32.2	34.7	37.9	32.5

出典 INS (2016:22)

おわりに

本章では、Iにおいて北アフリカの「家族」に関する研究動向を解説し、IIにおいて「家族」構造の根底にある人口変化についてチュニジアを中心に概観した。ショーレの「大家族」モデルは、分割相続制度の下で兄弟間というヨコのつながりが個人の生存戦略にとっての重要な資源となることを示唆している。しかしその一方で、少子化が進むなかで、兄弟や姉妹の数が減っている状況がある。北アフリカ農村社会における「大家族」モデルについて、人口と家族構造を踏まえて再考することが今後の研究課題である。

¹¹ 1966年の未婚者比率はVallin (1971: 250)を参照。

<参考文献>

<日本語文献>

- 岩崎えり奈 1996. 「チュニジア南部ゴムラッセンの単身出稼ぎ」『アジア経済』第37巻第1号。
- 2018. 「チュニジア：家族計画と女性の変化」村上薫編著『不妊治療の時代の中
東：家族をつくる、家族を生きる』日本貿易振興機構アジア経済研究所。
- 加藤博 1983. 「近代エジプト農村社会研究のためのノート」『東洋文化』第63号。
- 加藤博ほか 2017. 『カフル・マー村研究：北西部ヨルダン山村の社会構造とその変
容』SIAS Working Paper Series, 28 上智大学イスラーム研究センター。
- 木村喜博 1973. 「農地改革前におけるエジプト農村社会の構造—共同体的構成の視角か
ら」川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所。
- 中岡三益 1973. 「エジプトにおける共同体—財産占取の形態と主体にかんするノー
ト」川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所。
- 宮治美江子 1993. 「移住の人類学序説」『応用社会学研究』第3号。

<外国語文献>

- Antoun, Richard T. 1963. *Kufr al-Ma: A Village in Jordan, A Study of Social Structure and Social Control*. Dissertation. Harvard University.
- . 1972. *Arab Village: Social Structure of a Trans-Jordanian Peasant Community*.
Bloomington: Indiana University Press.
- Antoun, Richard and Iliya Harik (ed) 1972. *Rural Politics and Social Change in the Middle East.*,
Bloomington: Indiana University Press.
- Baer, Gabriel 1969. *Studies in the social history of modern Egypt*. Chicago and London:
University of Chicago Press.
- 1976. *Population and Society in Arab East*, Connecticut: Greenwood
Press.
- Ben Salem, Leila. 1994. “La famille en Tunisie : questions et hypothèses”, in *Structures
familiales et rôles sociaux*, Actes du Colloque de l’Institut Supérieur de
l’Education et de la Formation Continue, Tunis : Cérès Editions.
- Berque, Jacques 1955. *Structures sociales du Haut-Atlas*, Paris : Presses Universitaires
de France.
- 1957. *Histoire sociale d’un village égyptien au XXIème siècle*, Paris :
Mouton.
- Bouchemal, Salah 1997. *Mutations agraires en Algérie*, Paris : l’Harmattan.
- Bourdieu, Pierre 1980. *Le Sens Pratique*, Paris : Les Edition du Minuit.

- Charrad, Mounira 1990. "State and Gender in the Maghrib", *Middle East Report*, n.163, vol. 20, n.2, march-april,.
- 2001. *The Origins of Women's Rights: State and Tribe in Tunisia, Algeria, and Morocco*, Berkeley: University of California Press.
- Chaulet, Claudine 1987. *La Terre, les frères et l'argent*, Alger : Office des Publications Universitaires, 3 tomes.
- Descloîtres, R. et L. Debzi 1963. *Système de parenté et structures familiales en Algérie*, *Annuaire de l'Afrique du Nord*, Editions du CNRS.
- Duvignaud, Jean 1968. *Chebika*, Paris: Editions Gallimard.
- Gallissot, René et Gilbert Badia 1976. *Marx, marxisme et Algérie*, Paris : Union Générale d'Editions.
- Gana, Alia 1998. *Agricultural Restructuring, Household Practices and Family Farm Differentiation : A Case Study of the Region of Zaghuan*, PhD thesis, Cornell University.
- Geertz, Clifford, Hildred Geertz and Lawrence Rosen 1979. *Meaning and Order in Moroccan Society, Three Essays in Cultural Analysis*, London et al.: Cambridge University Press.
- Gellner, Ernest and John Waterbury 1977. *Patrons and Clients in Mediterranean Societies*, London: Gerald Duckworth and Co.
- Hopkins, Nicholas 1993. "Small Farmer Households and Agricultural Sustainability", Faris, M.A. and M.H. Khan (eds), *Sustainable Agriculture in Egypt*, Boulder and London: Lynne Rienner.
- Hopkins, Nicholas S. (ed.) 2003. *The New Arab Family, Cairo Papers in Social Science*, vol. 24, n.1/2.
- Institut National de la Statistique (INS) 2016. *Recensement Général de la Population et de l'Habitat*, Volume 3, *Caractéristiques Démographiques et Fécondité*. Tunis : INS.
- Iwasaki, Erina 2006. "Analytical Framework for the Analysis of Kinship in North African Rural Societies: a Case Study of Commercial Migration in Southern Tunisia", *Mediterranean World* 18, the Mediterranean Studies Group, Hitotsubashi University.
- Iwasaki, Erina 2007. "What is the Aila? : A Comparative Study of Kinship Structure in Egyptian Villages", *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)*, vol.22-1.
- Joseph, Suad (ed.) 1999. *Intimate Selving in Arab Families: Gender, Self, and Identity*,

- Syracuse, Syracuse University Press.
- King, Stephen Juan 1997. *The Politics of Market Reform in Rural Tunisia*, PhD thesis, Princeton University.
- Latowsky, Robert J. 2000. *Community Experiences of Rural Transformation in Egypt, 1960-1980*, PhD thesis, State University of New York.
- Mehanna, Sohair et al. 1994. *Farmers and Merchants: Background to Structural Adjustment in Egypt*, Cairo Papers in Social Science, vol.17, monograph 2, summer.
- Mitchell, Timothy 1998. "The Market's Place", Hopkins, Nicholas S. and Kirsten Westergaard (eds), *Directions of Change in Rural Egypt*, Cairo: The American University in Cairo Press.
- Simon, Gildas 1995. *Géodynamique des migrations internationales dans le monde*, Paris : PUF,
- (dir.) 1990. *Les effets des migrations internationales dans les pays d'origine : le cas du maghreb*, Paris: SEDES.
- Singerman, D. and H. Hoodfar 1996. *Development, Change, and Gender in Cairo: A View from the Household*, Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press.
- Singerman, Diane 1997. *Avenues of Participation: Family, Politics, and Networks in Urban Quarters of Cairo*, Cairo: The American University in Cairo Press.
- Temime, Leila Blili 1999. *Histoire de familles : mariages, répudiations et vie quotidienne à Tunis 1875-1930*, Tunis : Script.
- Valensi, Lucette 1977. *Fellahs tunisiens : l'économie rurale et la vie des campagnes aux XVIIIe et XIXe siècles*, Paris et La Haye: Mouton & Co.
- Vallin, Jacques 1971. "La nuptialité en Tunisie", *Population*, vol.26.